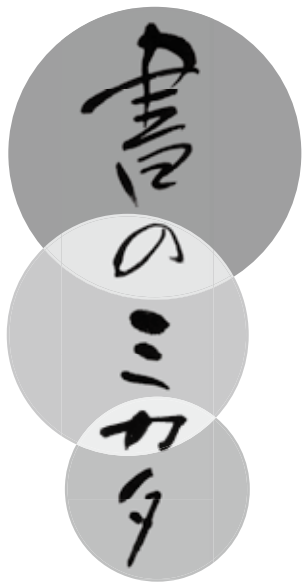




顔真卿「自書告身帖」

唐時代・建中元年（七八〇）

鍋島 稲子

メインタイトル「書のミカタ」は、いわゆる書を鑑賞する「書の見方」という意味と、私が「書の味方」という立場で楽しくお話していこうという意味を込めてつけてみました。一年間、書道博物館で展示されるさまざまな名品を紹介していきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

顔真卿（七〇九～七八五）の「自書告身帖」は、書道博物館所蔵品の中で最も知られている作品の一つにあげられるでしょう。「告身」とは辞令のことであり、吏部尚書から太子少師に転任するよう命じられた時に自ら書いたことから、この名称で呼ばれています。七十二歳の書です。

顔真卿は唐の玄宗、肅宗、代宗、徳宗に仕えた文官であり、歴史上では安祿山の反乱に際し、義軍として抵抗した忠臣として知られています。官界にあっては顔真卿の頑固な性格が災いし、宰相から反感を抱かれることも多かったようです。この辞令は、時の宰相であった楊炎から告げられ

た、いわば「降格人事」であり、要職から閑職へうつされた時のものです。顔真卿の剛直さは権臣との対立を生み、彼は度々こうした閑職に左遷されています。

本作は、向勢を用いたふつくらとした字形で、蚕頭燕尾というカイコの頭のようにまるい起筆と、ツバメの尾のように二つに分かれた右払いを特徴とする筆法で書かれています。この表情豊かな書風は顔法と呼ばれ、晩年になるにつれてより顕著になっていきます。

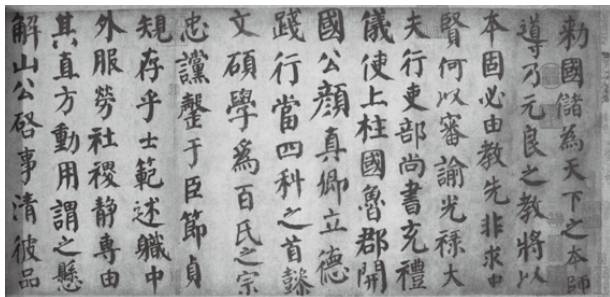
顔法は、後世に少なからず影響を与え、顔真卿に私淑した宋の四大家の一人である蔡襄もこの「自書告身帖」を目撃した後、堂々とした顔法で跋文を書いています。

「自書告身帖」は、宋時代に皇帝のコレクションとして内府に収蔵されていました。その後、民間に渡りましたが、乾隆帝の時に再び清朝内府に入り、清朝末期には恭親王、そして道光帝の曾孫である溥儒の所蔵となりました。しかしこの頃、復辟運動が盛んに行われ、皇族及び有力者は、資金作りのために数多くの貴重品を売り、あるいは質に入れたといわれています。清朝皇室も収蔵品を一時的に手放すことを余儀なくされ、「自書告身帖」は当時日本四大財閥の一つであった三菱の質に入られました。期限が来てもそれを取り戻す経済力はすでになかったようで、そのまま売られることになったのです。三菱は書家を集めて鑑賞会を行ない、中村不折はその時「自書告身帖」に一目惚れましたが、とても手に届くような値段ではありませんでした。

しかし他の財閥との話し合いも進まず、関係者が考えた末、値段を下げて中村不折に売ろうということになります。それでも一個人が購入できる額ではなかったようで、その後何度も交渉を重ね、月賦ということになったとか話がまとまりました。

ところが、契約と同時に五千元だけ払い込んでくれと売り手側が言い出したため、不折は方々から借り集めて五千元を準備し、ようやく入手。残額は絵画の収入を当てていくことになったそうです。不折は「天下の三菱や大倉が買えなかったものを、根岸の絵かきを買ったということになるんだから、さしづめ僕は三菱や大倉よりもっと富豪ということになるわけだ」といつて大笑いしたといえます。残された不折のメモには「維時昭和五年七月三十日顔魯公告身帖真蹟入弊齋 中村不折記」と、入手した日付が記されています。

中国の歴代皇帝や文人たちが愛してやまなかった「自書告身帖」が、なぜこの小さな博物館にあるのか・・・そんな裏話も、作品を楽しむことの一つになるかもしれません。



自書告身帖

※自書告身帖は、4月16日から5月12日まで、書道博物館企画展「唐時代の書、徹底解剖！！」で展示されています。

《筆者略歴》

筑波大学大学院博士課程芸術学研究科修了。
現在、台東区立書道博物館主任研究員。

《題字・吉田菁風》

平成二十五年度編集担当ご挨拶

世の中は混沌とした政治、少子高齢化の問題を含めた先行き不安な経済など話題に事欠くことはありません。

反面、各種スポーツ界での好成績、また学術面での受賞などうれしいニュースも耳にします。安定した明るい世の中であってほしいと願わずにはいられません。

「忙中閑あり」という言葉がありますように、「閑」はとても貴重です。「閑」は人に書物を読ませ、名所旧跡を旅させ、好きな音楽を聴かせ、そして書道に勤しませてくれます。

本院は「全書芸誌」発刊以来、古典を重視してきました。臨書は「古人」との対話です。多分に含まれた栄養素を自らのものとして取り入れ、そこから創作へと飛躍するために欠かすことはできません。

六十余年間継承されてきた本院の理念を踏まえ、学書の一助となるべく、編集担当者五名、精一杯努めてまいります所存であります。

役員、支部の先生方、会員の皆様のご教示、ご支援をお願い申し上げます。

平成二十五年三月

全日本書芸文化院



平成二十五年度編集担当

吉田 菁風
杉浦 華桂
小泉 移山
石川 升心
別府 史風

編集後記

○前年度の表紙がハイカラ（斬新）でしたので、今回はレトロ（古風）にしてみました。鄭道昭の摩崖「安期子題字」です。

○表紙Ⅱでは鍋島稲子先生（台東区立書道博物館）に「書のミカタ」と題して、十一ヶ月連載していたいただきます。「ミカタ」をカタカナにしてあります。これは掛詞。これから楽しみです。

○二月十一日に実施された書初席書大会では、優秀作品に囲まれて、ちびっこ書家たちが腕を奮って大きな拍手を浴びていました。

○「学書の友」では近世大家の同一古典の臨書を比較してみました。それぞれ趣があり、芯を捉えています。目習いも大事です。

○昇段級試験の課題が発表されています。年に一度のチャンスです。受験要項を熟読して早めの準備を。充実した紙面を目指して編集に努めてまいります。前任の編集者同様よろしくお願いします。（書風）

平成二十五年三月十日 印刷
平成二十五年三月十五日 発行

代表

編集者

発行者

印刷

大倉 谷山

吉田菁風・杉浦華桂

小泉移山・石川升心

別府史風

岩本

株式会社

カワイ

登

全日本書芸文化院

振替 〇〇一五〇七二二五

電話 〇三三三九九三三三

FAX 〇三三三九九三三三

http://www.z-shogei.co.jp